

# 互いに助けあい自立へ向かう

## 浮かび上がったきた生活困窮層の実態

「抱樸館」は仕事、住まい、人との絆を失った人々の自立を支援する施設です。

メディアでは「僅かずつ経済は回復基調」と報じられています。しかし、これまではあまり見られなかった若年層の困窮者が増えてきており、「抱樸館福岡」でもその傾向が顕著に見受けられます。報道される経済状況とは裏腹に、生活に困窮する人々は幅広い年代層に広がっています。

5月1日に開所してから約2ヵ月の抱樸館福岡取材しました。

## ホームレス問題を考える 17



昼食後に開かれた就職のためのセミナー。講師は亀津正武さん(北九州社会福祉ボランティア大学元校長)。面接に臨む時の心得などが話された



相談員といっしょに昼食を摂る。「このみかんはスッパイ」声が明るい

手作りの昼食。温かいご飯はおかわり自由



ボランティアとの茶話会も開かれている



雨の日の汚れやすいエントランスをきれいに掃除する入居者。背中汗でびしょりだ

抱樸館福岡が入居者を迎えるのは約1ヵ月の6月18日、入居者は29人となっている。開所当初は、巡回訪問や炊き出しなどの時の働きかけで、入居するホームレス者が少しずつ増えていくと考えられていた。しかし、スタートしてみると電話での問い合わせが圧倒的に多く、年齢も幅広い。特に40歳代以下の若い層の相談が増えている。状況も長期の野宿状態以外のケースも多く、長期化・高齢化がホームレス者の傾向と言われる一方、これまでは見えにくかった困窮者の姿が、浮かびあがってきている。

同様に現在入居している人たちも、背景はさまざま。定職もなく友人の家を転々としていた若者、家族との関係が破綻した人、精神的な病気による失業、不況による事業の失敗からすべてを失う、派遣切りや長期の野宿状況の人もある。問いあわせ時点での状況も、

### 自立に向けて

現在、相談員は1人で3〜4人の入居者を担当する。経験の浅い若い相談員が多いことから、8人の相談員が2チームに分かれ責任者を中心にチームとして、担

当の入居者の対応に当たっている。副館長の瀬崎篤弘さんは「開所して2ヵ月。見学者も多く、スタッフはフル回転の状況が続いた。最近やつと落ち着いてきている。入居者の背景も多様で、これまで経験したことのないケースも多い。若いスタッフが多いが全員で力をあわせて対応している。入居者は、大きなトラブルや問題を起こすこともなく、ルールも自発的に守り、掃除などもみんな積極的にしている。一人ひとりの自立に向けたケアも少しずつ進んでいる」と現在のようすを話す。

入居者は、基本的なルールを守ることは、比較的自由だ。玄関には自転車が入らない。外出に使用されている。就職活動、各種の手続きに外出する人、セミナーに参加する人、熱心に玄関を掃除している人。ここでの生活が一人ひとりの入居者の日常となっている。

## スタッフ紹介

### 入居者のがんばる姿にはげまされ



相談員 藤田寿規さん 23歳

ら、自然に言葉が出てくるようになった。日々が勉強の連続。仕事は大変だけれど、充実した毎日を送っている。



気軽に相談に応じる



相談員 上野麻帆さん 22歳

4人の入居者を担当している。体調など、細かなところにも気を配らなければならぬが、経験も何もない自分に、年齢も経験も大きな差のある入居者の役に立っているのか、時々不安になる。チームのメンバーと相談することができるので、とても助かる。元来口下手で、はじめはマニュアル通りにしか話せなかった。今では、入居者のことをもつと知らなければ役に立つことができないとの思いが

福祉系の専門学校でソーシャルワーカー科を卒業。テレビで放映されたNPO法人北九州ホームレス支援機構の活動に感動し、北九州と福岡の炊き出しに参加しはじめた。その時、この募集を知った。家族はグリーンコープの組合員、この仕事につくことにまったく不安はなかった。

はじめは、自分が若いことから、入居者が何でも相談してくれるのか、その相談に自分が共感を持って対応できるのか不安だった。一人ひとり、顔を合わせて話をしていると、そんな危惧はすくなくなくなった。長い野宿生活や家族との関係など、複雑で難しい問題へ



事務 田中敦子さん 47歳

学生の頃から、アルバイトの行き帰りに見かけるホームレスの人たちに強い関心を持った。どんなことを感じながら、生きているのかなあ。と。6年前から「福岡おにぎりの会」などの支援活動にボランティアとして加わるようになり多くの出会いを体験した。抱樸館福岡では、経理などの庶務を担い、入居者に向けて気持よく過ごしてもらうため、居室備品の調達や日用品の用意などにも心を砕いている。入居者にとってもスタッフにとっても「お母さん」のような存在でありたい。

入居者は、口には出さないが癒しがたいような傷を内に抱えていることが多いと感じる。この家庭的雰囲気の中で、少しずつ自己肯定感を取り戻し、自信を持って再出発してもらいたい。